

復活節第五主日 2014.5.18

わたしは道であり、真理であり、命である

ヨハネ 14章 1-12節

14:1 「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。

14:2 わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。

14:3 行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとの迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。

14:4 わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」

14:5 トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか。」

14:6 イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。

14:7 あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知るようになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。」

14:8 フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言うと、

14:9 イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言うのか。

14:10 わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。

14:11 わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。

14:12 はっきり言うておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。

いま 14 章の 1 節から 12 節まで読みました。きょうのテキストは告別説教と呼ばれイエスの遺言として知られている箇所、ヨハネ福音は 13-17 章まで、全体の 1/4 を占めるボリュームで記されています。福音をかさで測るのもおかしいのですが、いかに福音記者ヨハネが重要視したのかがうかがえます。

「心を騒がせるな」で始まる 14 章の前の 13 章をみると、ユダの裏切り、ペトロの離反予告（三度イエスを知らないという）が記されています。この出来事で弟子たちは動揺します。それを受けて 14 章で心を騒がせるなとイエスは語りだします。

<好き嫌い、信じる信じられない>

人には好き嫌いがあります。きゅうりが嫌いという人がいます。きゅうり好きの人からすればあんなに美味しいものを嫌いだなんてってはなしになります。食べ物の好き嫌いに理屈はあるようでないので、ただ好きは好き、嫌いは嫌いということです。信じることに理屈はないので、信じる人は信じるし、信じない人は信じないということです。きゅうりのここが嫌いといくら説明してもきゅうり好きの人を説得することはできないでしょうし、同じように信仰を理屈でいくら説明しても信じない人は信じません。それでもイエスは言います。

14:1 心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。

イエスは「神を信じ、またわたしを信じなさい。」と言います。ここで、私は信じない、私は信じません、信じられません、つまり、NO と答えた人はまた心の騒ぐ繰り返しのうちに戻ってしまいます。テキストでは弟子たちも「信じられません」というようなことをいっている。だから心騒ぎがおさまらない。おまえたちの場所は用意しておくといっていたであろうが、戻ってくるといってるじゃないか、とトマスに語り、またフィリポには、どうして

長い間いっしょにいるのにこんなことがわからないのか、イエスはいいます。
＜わたしは道であり、真理であり、命である。＞

なまじいにイエスを知っていると復活のイエスがよくわからない、見えない
ということがあるのかもしれませんが。弟子たちも復活のイエスに出合って信
じたことをわたしたちは知っていますが、きょうのテキストでは、信じる、
信じないでドタバタしている様子が記されます。また 13 章で予告された、ユ
ダヤペトロは心騒ぎするところのはなしではなく、混乱の極みに追い立てら
れているはずです。でもこのような弟子たちの心騒ぎがあったので「わたし
は道であり、真理であり、命である」というイエスの福音が発せられました。
この力強いイエスのことばは今日のわたしたちにとってともし火であり希望
になります。でもテキストをよく読んでみると、このことばはトマスを信じ
させる決め手とはなっていません。わたしを通らなければとか、わたしを
知っているならなどという条件がつていることにつまづき、問題があったの
でしょうか。たしかにユダヤ教の伝統のなかで育ち、生きてきた彼らにはと
んでもないこと、神に対する冒涇と受け取ることもできるような表現です。
また現代に生きるわたしたちにとっては独善的、排他的な原理主義を思わせ
ます。歴史の中でもキリスト教はその旗の元でおおくの過ちをおかしてきた
事実は隠すことはできません。「わたしは道であり、真理であり、命であ
る」という至極のイエス福音をいまの時代に生きるわたしたちは 掛け値な
し・条件なしで捉えなおし自らのものとする必要があります。

＜復活のイエス＞

さて、いまは復活節です。イエスのよみがえり祭りをしている時期に復活の
はなしではなく、なぜ受難前のイエスの遺言説教を聴く・朗読するのでしょ
うか。ちょっとヘンです。でも教会の伝統はこの復活節にこの福音を読みつ
いできました。ということはきょうのテキストは復活のイエスが語ったこと
ばとして聴くという理解・解釈を暗にふくんでいます。

この世界は三次元の世界だといわれることがあります。三次元とは縦・横・高さの3次元で世界が構成されていることをいっています。縦・横しかない二次元、それに高さが加わると三次元となります。たとえば、絵とか写真は紙の上（平面）で表現できる二次元、彫刻はそれに高さが加わって三次元での表現です。一般的に空間は縦横高さがあり、これはあたりまえなことなので常識として理解できます。ところで三次元の次に四次元という概念があります。三次元に「時間」を加えて四次元とします。四次元となるとややこしくなるのですが、宇宙に関していえば空間（縦横高さ）の三次元に時間という次元を加えた四次元の世界という捉え方をしています。月は地球を回り、地球は太陽を回り、太陽は銀河を回り、銀河は・・・と以下宇宙の果てまで続きます。

さてイエスはユダの裏切り、ペトロの離反を予告しました。ユダヤの宗教的伝統に従えばこれは預言であり神から受けたことばです。預言者以上のお方であるイエスならとりわけ驚くべきことでもないのかもしれませんが。またこれはいま紹介した四次元をつかっても理解できます。イエスは三次元の空間だけでなく、四次元の「時間」を加えてこの世をみる事ができた。ユダをペトロを時間の中の存在としてみる事ができた、つまりこれから起きることがイエスには見えていた、わかっていた、だから予告できた、予告したということです。ということはトマスのごとも、フィリポのごとも予見できていた。その上でのイエスのことば、非常に重たいことばです。

<さいごに>

イエスも2000年のむかし、エルサレムの二階座敷の部屋で弟子たちを前に告別の説教をおこないました。どこからきて、どこへいくのかをご存知のイエスが語られる最後のことばは天から、宇宙（そら）からのことばです。わたしたちも同じことばをきょうも会堂で聴いています。イエスを信じるものとなれますように。そして自らの心の騒ぎをおさめることができますように。

わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい
(14:11)